

## 審査の結果の要旨

「先秦家族関係史料の新研究」

氏名 小寺 敦

中国の春秋戦国時代は、未曾有の社会変動を経験した。そのため、この時代に関する研究の一つの醍醐味は、その社会変動の有り様にいかなるメスを入れて取り組むかにある。

ところが、従来の研究は、様々な伝統を背負っている。漢代訓古学以来宋明理学を含む二千年の経典解釈史に、近代以来の民族学や歴史学などが加わる。加藤常賢によって、民俗学や歴史学の方法が総合的に議論された後、研究は個別化、緻密化の過程をたどるが、近年の動向には、経典の伝統的解釈に根ざした方法への回帰も見られ、民族学や歴史学的方法の成果が見にくい状況に置かれる傾向もある。

提出者の研究は、民族学的、また歴史学的方法を研究史としてたどりつつ、『左伝』など先秦史料に見える宗法制の研究、女性に関する研究、民族学的研究それぞれの研究対象を丹念にたどり、その史料の成り立ちを検討して、金文銘文という考古遺物との比較を試みるなど、従来なされてこなかった方法的検討を行って、従来の研究が背負っている様々な伝統が今日に残す影響を論じる。金文の研究史において、さまざまな研究史的伝統がなまの形で関わった結果、考古遺物としての史料を伝統解釈学の立場から説明しているなどの指摘は、同時代史料として使われやすい材料の中に、後代の解釈という異質の材料が混入していることを示すもので、今後の研究に投げかける意味は大きい。

ただし、婚姻記事を『春秋』三伝にしぼって検討し、出土史料と伝存の文献を、女性関係記事にしぼって比較し、その成果を使って、『詩』の成立を扱うと特徴的にまとめられる今回の提出論文は、全体に、先秦家族史の再構築を行う上での基礎作業に、多くの時間を費やしている。それだけに、今後になげかけられた論点が多岐にわたって存在し、その意味では今後の課題をも多く内包するものである。

たとえば、『左伝』に引用された『詩』をてがかりに、自分の方法をも加味した『左伝』の検討を援用して、検討を進め、『詩』が中原を含む北および秦を含む西の地域で成立し、楚を含む南の地域に伝播していったことを時期にからめて論じている点などは、従来の見解と大きく相違するもので、提出者が家族史関係史料としての検討を企図した当初の目的をはるかに越えて、関連する研究史上の議論を惹起することが予想される。

一部検討の粗さを指摘されるところもなくはないが、方法自体の問題ではなく、全体的に丹念な検討がなされている。家族史関係史料を扱う上での基本的スタンスも好感がもたれた。さらに、今後の研究上の発展が、さまざまな方面で期待できそうである。よって、当審査委員会は、提出論文が、博士（文学）を授与するに値するとの結論にいたった。